

共感と他者理解

学校教育学研究室 守 屋 淳

Empathy and Understanding the Other Person

Jun MORIYA

This article attempts to clarify the phenomenon of empathy, taking our 'lived experience' as its base. Some suggestions concerning its relation to understanding the other person are also given.

In Chapter I, some of the significant studies of empathy (or sympathy) in philosophy and psychology are reviewed, and our everyday usage of the term 'empathy' is examined. Through these examinations, empathy is provisionally defined as 'to live the identical world with the other person in an affective experience'.

In Chapter II, the meaning of the 'identity' in the above definition is explicated. The 'identity' here means the identity of the 'kernel' of our lived experience accompanied with some different implicit horizons.

In Chapter III, in order to make explicit the lived phase of the identity, the traditional view of self and other—that is, the view in the subject-object scheme—is critically rejected. Only in the state of fusion of self and other, can both live the identical world.

In Chapter IV, the attitude under which a deep empathy could occur is clarified. And how the experience of empathy transforms the experiencer's world is also discussed.

Finally, in Chapter V, the great significance of empathy, as one of the ways of understanding the other person, is emphatically pointed out.

目次

はじめに

I. 共感はいかなる現象と考えられるか

——予備的考察——

A. 共感の先行諸研究

1. 哲学、倫理学における共感の主な研究
2. 心理学における共感研究の傾向

B. 「共感」の日常的用法の検討

C. 他者と同一の世界を生きることとしての共感

II. 共感における「同一」の問題

A. どのような意味での「同一」か

B. 「同一」はどのように判断されるのか

III. 自他融合と生きられた同一性

A. 自我観の転換と自他融合

1. 伝統的な自我観
2. 「こと的」自己観の成立
3. 自他融合の状態

B. 自他融合と共感

IV. 共感の発生とその意味

A. 共感の発生

B. 共感者にとっての共感の意味

1. 自他の違いと共感
2. 世界の変容としての深い共感

V. 共感と他者理解

おわりに

注

はじめに

教育において、他者理解のあり方は様々な場面で問題となりうる。まず、教師が子どもをどう理解しているかが、その場で行なわれている教育の質を大きく規定している。また、ひとりひとりの子どもが、教師をあるいは他の子どもをどう理解しているか、も同様である。さらには具体的な授業の中で、教材中に登場する人物をどのように教師と子どもが理解していくかということも、授業のあり方を大きく規定している。

他者理解のあり方の一つとして「共感」と呼ばれる現

象がある。そして「共感」ということばは、「共感性をもって子どもと接したい」とか「主人公の気持ちを共感的に理解させたい」等というように、教育実践の場でも頻繁に用いられている。しかしそこでは、共感がどのような現象なのかについては、十分に検討されないまま用いられているように見受けられる。一方、共感は哲学や心理学等において研究の対象とされてきている。ところがそこでは、その定義について、既に互いに相矛盾するほど多様なものが見られる¹⁾。従って、共感という現象自体についても多様な見解が提出されているものの、未だその中から結論を見出すには至っていない。

そこで本稿では、まずこの共感という現象をその基盤から問い直し明らかにしていくことを目標とする。そして、さらには共感の他者理解一般への関係を示唆することをめざしたい。

1. 共感はいかなる現象と考えられるか ——予備的考察——

ここではまず、共感の先行諸研究を参照し、さらには、我々の日常の「共感」ということばの用法を検討しながら、研究の手がかりを得ることとする。

A. 共感の先行諸研究

「共感」と呼ばれる現象は、哲学、倫理学、心理学等で研究されてきている。欧米語の sympathy, empathy (英), Sympathie, Einfühlung (独) 等が「共感」と訳されている²⁾ので、これらについての諸研究を検討することから始めよう。

1. 哲学、倫理学における共感の主な研究

まず、アダム・スミス (Smith, A.) は、共感 (sympathy) とは人間なら誰もがもっている本性で、他者の境遇を見ることによって我々の中に起こる感情のことであり、これは、我々が自分ももしそのような立場に立ったらどう感じるであろうかと、我が身をその場に置きかえる想像力によって生じるものだとしている³⁾。

次にリップス (Lipps, T.) にとっては、共感 (Einfühlung⁴⁾) とは他者を認識するための本能的根源的作用であって、それは次のような複雑な過程をもつ。まず他者の身振りが私に知覚されるが、それによって本能的に私の身体は他者のそれを模倣する。そして私のその身振りが、かって私が同じ身振りをした際にもった感情と結びつき、それをさらに他者の身体に結びつけて知覚するのである⁵⁾。

さらにシェラー (Scheler, M.) は、共感 (Sympathie)

とは上の二人の述べたような複雑な間接的過程を経たものではなく、直接的無媒介的な一体感に基づいて他者の感情を追感得 (nachfühlen) し、その追感得に基礎づけられた他者との共同感情のことであるとしている^{6,7)}。

2. 心理学における共感研究の傾向

最近の心理学においても、臨床心理学で共感的理解 (empathic understanding) が必要とされとりあげられた⁸⁾のを始めとして、発達心理学において共感性の発達や性差等⁹⁾が、社会心理学において共感と向社会的行動 (prosocial behavior) や利他行動 (altruistic behavior) との関係等¹⁰⁾が研究されるなど、様々な領域において共感 (empathy) が研究されてきている¹¹⁾。

これらの諸研究においては、それぞれの共感の定義に基づいて、様々な方法で共感性が測定されているが、これらの諸定義には主として次の二点において対立が見られる。すなわち、第一は、共感とは「他者の感情がわかること」(認知としての共感) であるとするものと、「他者と同じ感情をもつこと」(情動としての共感) であるとするものとの対立である¹²⁾。また第二は、共感とは自己の感情を他者に移し入れて、それを他者の感情として認めるのだとする、すなわち「自己→他者」の方向性をもつものだとするものと、逆に、他者の感情が先行し、それを自己が感じとってとり入れるのだとする、すなわち「他者→自己」の方向性をもつものだとするものとの対立である¹³⁾。

この二つの共感の定義をめぐる対立については決定的な結論はまだ出ていない。最近では、それぞれの対立について、その両者が交じりあったものだとする見解¹⁴⁾も提出されている。しかしそこでも、それぞれの対立における両者の間の関係が明らかにされているとはまだ言い難いのである。

B. 「共感」の日常的用法の検討

上述の先行諸研究に見る通り、共感という現象についての研究は、その定義においてからして統一がないほど多様である。そこで次に少し角度をかえて、我々が日常どのような現象を「共感」ということばで呼んでいるのか、という点から考察してみよう。

例えば、私の目の前にいる人が悲しみ、泣いている。私は彼の悲しみがよくわかり、思わずもらい泣きしてしまう。また小説を読み、映画を見、あるいはテレビを見て、その登場人物と共に泣き、笑い、怒る。これらの経験を我々は、私とその人物に「共感」したのだと言う。これらの諸例においては、私は他者の感情を理解している。

しかしこの場合、実は私はただ単に他者の感情を理解しているだけではない。例えば我々がテレビでいわゆる「悪役」を見る時、彼が喜ぶ場面を見て、我々は彼が喜んでいることを理解はしている。しかし、普通これを「共感」とは呼ばない。我々が彼と一緒に喜んではいないからである。つまり、共感という現象においては、私は他者の感情を理解するだけでなく、他者と同じ感情をもっているのだ、ということがわかる。

ところで、私がある人とけんかをするというような例ではどうであろうか。私は彼が怒っていることはわかる。また私も彼と同じ「怒り」という感情をもっている。しかし、この例では私が彼に共感している、とは言えない¹⁹⁾。つまり、単に、他者の感情を理解し、他者と同じ感情をもつ、というだけでは共感の定義としてはまだ不十分なのである。

C. 他者と同一の世界を生きることとしての共感

このことを明らかにしていくためには、我々によって生きられた経験のレベルからの考察が必要となってくる¹⁶⁾。

我々の経験は、常にある時間、空間の中で起こり、それらは主観的に意味づけられた上、生活史的に沈澱していき、我々の経験の複雑な地平構造¹⁷⁾を作りあげていく。そして、個々の経験においては、我々はその経験の中心的な対象たる「核」を志向し、それはまた様々な地平に囲まれているのであり、この地平の総体が我々の生きている「世界」なのである¹⁸⁾。

共感における「他者と同じ感情」もこのレベルで考えなければならない。すなわち、単に感情の種類が同じか否かが問題なのではないのである。感情的経験においては必ず志向の対象がある。我々は、そうした志向の対象を核としつつ地平構造を携えた世界を生きているのである。このような意味での世界が、私と他者とで同一であるかどうかの問題なのである。そして、このような意味での他者と同一の世界を生きられれば、私は当然他者の感情を理解することはできるのである¹⁹⁾。逆に他者の感情を理解はしても、他者と同一の世界を生きていない場合は十分に考える。つまり、他者と同一の世界を生きることが、共感にとっての必要条件であると考えられることができるのである。

従ってここではひとまず、共感を「感情的経験において他者と同一の世界を生きること」と仮に定義しておくこととしたい。

Ⅱ. 共感における「同一」の問題

仮に上述のように共感を定義したとして、他者と「同一」の世界を生きることなどそもそも可能だろうか。また、可能だとしても、それはどのような意味における「同一」なのだろうか。さらにまた、その「同一」は誰がどのようにして判断するものなのだろうか。本章では以上のような問題について考察していく。

A. どのような意味での「同一」か

まず、我々の経験において、我々の占める空間的位置はひとりひとり違う。従って知覚的経験におけるパースペクティブ²⁰⁾はひとりひとり違う。さらには、視力、聴力などの知覚能力も違う。そしてまた、それぞれの経験に対する地平構造もひとりひとり違っている。このような事実から、私と他者の世界が「同一」であるなどということは、そもそもありえないことのようにも思われる。

しかし、共感という現象においては、何がどのような方向からどのように見えるか、というような「知覚的射映相²¹⁾」の違いはほとんど問題にならない。つまり、パースペクティブや知覚能力の違いは原則的には問題ではない。さらに、共感時の経験の地平構造についても、その時点において潜在的となっている地平構造の違いはあまり問題ではない。共感において問題となるのは、今まさに経験されている核がどのようなものとして捉えられているか、つまりその「所知相²¹⁾」が同一であるかどうか、ということなのである。

このような意味における「同一」が、共感における「同一」の基本的なあり方なのである。そしてまた同時に以上からわかるように、共感における私と他者の世界の同一性とは、私と他者の世界が潜在的な地平までを含めて全く一致してしまうという意味での完全な同一性ではなく、常に顕在化する異質性を内に含んだ部分的な同一性であるということ、ここでまず確認しておくことが必要である。

また、共感について「浅い」共感と「深い」共感という区別がなされることがあるが、それはこの同一性の程度、つまり共感時における経験の地平構造の一致の程度、に関係づけて理解することができよう。すなわち、単にその経験の核の意味づけが一致しているだけに留まるならば、それは浅い共感であるし、逆に地平構造の一致している部分が大きければ、それは深い共感であると理解されよう。

B. 「同一」はどのように判断されるのか

ところで、このような私と他者の世界の同一性は、誰がどのようにして判断するのだろうか。

私が他者に共感している時、私はその感情的経験を志向して生きている。ところが、もし私が私と他者の世界が同一であることを判断しようとするれば、私は私の世界と他者の世界に注意を向け、それらを比較しなければならぬ。従って、たとえ私と他者の世界の同一性が判断されうるものだとしても、それは共感がまさしく生きられている今において判断されるのではなく、事後的反省的にのみ判断されうるものなのである。それゆえ、共感における私と他者の世界の同一性の様態を明らかにしようとするならば、むしろそれが判断される以前に「生きられている」様態をこそ、明らかにしていかなければならぬのである²²⁾。

しかし、その「生きられた同一性」の考察に移る前に、果たしてその同一性は誰が判断するのか、という点についても考えておかななくてはならない。

まず、共感における同一性は、基本的には共感者本人にしか判断できないのではないかと、とも思われる。なぜならば、ここで問題となる同一性が、地平の総体である世界の同一性である以上、その同一性の知覚は相貌的知覚であって、要素的項目的同一性の集積としては考えにくいからである。つまり、第三者としての研究者にとっては、このような意味での同一性を確認するのは困難だと考えられるのである。

しかしまた一方で、共感者本人の判断にも限界があるのではないかと考えられる。というのは、共感者自身が「私は他者と同一の世界を生きていた。私は彼に共感したのだ。」と思ったとしても、それは彼の思いこみにすぎず、実はその共感者が他者が生きていたものと判断した世界は、実際に他者の生きていた世界とは全く異なっていた、という場合もありうるからである。

例えば次のような場合がそれである。私はAという友人と音楽会に行く。帰り道、その音楽のすばらしさを堪能し心打たれている私に対して、Aは、「今日は本当にすばらしかったね」と言う。この時点で私は、「本当にそうだね」とAに共感を示す。ところが、それから話を進めていくうちに、実はAは音楽自体よりも演奏技術に興味をもっており、彼はその技術のすばらしさに感動していたのだということがわかったとしよう。すると、この時点から見れば、最初に私がAに共感したのは全くの誤まりであったと断言するであろう。

しかし、このような例においても、私とAとは、「音楽会においてすばらしいと感じた」という点でのみ考え

れば、同一の世界を生きただけだ、とも断言する。しかし、当然それに伴うべき、何をどのようにすばらしいと思ったのか、という点については全く一致していなかったのである。

この例は前述した「浅い」共感の例であると言いうる。しかし浅い共感においては、他者の世界のわずかな一部分を知覚するだけでは、それを生きることが困難であるが為に、私が私自身の世界に基づいて他者の世界を補足し、もともと他者の生きていた世界とは別の世界を構成していく、ということが往々にして起こる。このようなことが起こると、これはもはや浅い共感ではなく、共感者本人にとっては深い共感かのように知覚されているのだが、むしろこれは、「にせの」共感であると言いうことができる。他者理解において、「共感」すること自体を目標とするとき、このような危険性が伴うのである²³⁾。

本節の考察から、共感における自他の世界の同一性は、基本的には共感者本人によって事後的に判断されうるものであるとわかる。そして、共感者はその相手の生きる世界を確認し続けながら、その地平の同一性を拡大していくことによって、より深い共感へと至りうるのであるが、その確認を怠れば、逆に、誤まった「にせの」共感へ陥る危険を伴っていることがわかるのである。

Ⅲ. 自他融合と生きられた同一性

ところで、共感において自他の世界の同一性を共感者が事後的に判断しようするのは、既に判断される以前に、自他の世界の同一性が生きられているからに他ならない。それでは、なぜこのように同一性が生きられることが可能なのか。また何を基盤にどのようにして同一性が生きられるようになるのだろうか。このことを明らかにしていくためには、まず、「自己²⁴⁾」と「他者」とをどのように考えるのか、という所から考察を始めねばならない。

A. 自我²⁴⁾観の転換と自他融合

1. 伝統的な自我観

近代哲学の伝統の中では、自我はまず絶対に確実な源泉たる領域として、世界から、さらには他者から切り離されて措定されてきた。そして、そのような私²⁴⁾は、感覚器官を通して外部の事物を知覚し、また内的知覚(内感)によって、私の身体の状態を把握したり、回想したり、あるいは思考したりするのだが、それらは、他者には知られることのない、自我に絶対に内密な領域とされた。すなわちこのことを逆から言えば、私にとって他者

とは、その表情や身振り等は知覚できるが、その思考や感情等は原理的には認識されえないものということになるのである²⁵⁾。

従って、このような自我観に立てば、私にとってはその身体をしか知覚できない他者もまた、私と同じような自我をもった存在であると日常我々が考えているのは、いったいどうしてなのだろうか、という疑問が起きる。これは「他我認識の問題」と呼ばれる、近代哲学史上最大のアポリアの一つなのであるが、これに対しては、類推説、感情移入説等の解答が一応試みられている。例えば、アダム・スミス²⁶⁾の考え方は類推説を示しており、リップス²⁶⁾のそれは典型的な感情移入説である。しかし、類推説、感情移入説のいずれに対しても、既に様々な批判が加えられており²⁷⁾、これらが他我認識の問題に解決をもたらしたのだとは到底考えられないのである。

2. 「こと」的自己観の成立

これに対して、シェーラーの提出した直接知覚説は、類推、感情移入等の間接的過程を想定せず、他者は直接にその全体において捉えられる、と考えている。シェーラーは、類推説と感情移入説とに、私自身にはまず私の自我のみが与えられている、という前提と、他者については、その身体のみが私に与えられるという前提とを認め、これを批判し、否定している²⁸⁾。

ここにおいて、上述したような伝統的な自我観は否定され転換されてきているのである。ではここでは、自己と他者とはそれぞれどのように見られうるのであろうか。

伝統的な自我観においては、まず自我が措定され、さらに自我とは無関係に外界の事物が独立自存的に存在し、私はこれを感じ器官を通して知覚し、また逆にこれに働きかける、という図式で自我が理解されている。そして例えば、「私に花が見える」という現象は、その花から発した（反射した）光が、眼球を通して網膜に像を結び、これが視神経を経て脳に達することによって生じている、と説明される。ところが、この現象が私に経験されているレベルに定位して考えると、その花は網膜上に見えるのでも、脳内に見えるのでもなく、まさしく咲いているその場所に見えているのである。それゆえ、上述の説明は、「私には花がそこに見えている」という事態そのものの説明にはなっておらず、その現象から光学的なファクターをとり出した、一つの抽象にすぎないということになるのである²⁹⁾。

つまり、我々の経験のレベルにおいては、「私」という「もの」や、「花」という「もの」がまず措定されているのではなく、「私には花が見えている」とか、ある

いは「暗闇が私にとって恐しく現われている」というような「こと」が成り立っているばかりなのである。その時には、私と外部の世界とは分離されておらず、全体として一つの様相をもって現われているのである³⁰⁾。

すなわち、自己とはまずなによりも、このような「こと」において現われるのであって、それを事後的反省的に捉えた時にはじめて、「もの」としての自己、外界から分離した自己を認識することが可能となるのである³¹⁾。

3. 自他融合の状態

このように、世界から分離されず、世界と一体となった「こと」的自己をこそ、自己の根源的形態として認めるとき、そこにおける他者の現われ方も、当然、伝統的的自我観におけるそれとは異なってくる。

このことは、自己意識が未だ獲得されていない幼児の場合を想像してみれば分かりやすい。そのような幼児においては、例えば自分の手ですら「自己の」ものとしての特別な意味をもって捉えられはしない。ましてや、他者の身体が「他の」自己に所属するものだというような意識は、明らかに成立してはいない³²⁾。彼の生きる世界は、すべて自己のものとも他者のものとも区別はついていない。すなわち、他者もまた「もの」としては成立せず、世界と一体となって生きる自己と共に、自己の世界を形作っているのである。

このような状態を、我々は「自他融合」の状態と名づけることができよう。

もちろん、我々が根源的な「こと」的自己を反省的に捉えて「もの」的自己を発見したように、他者もまた、この原初的に生きられた自他融合の状態の中から、自己とは区別されたものとして「もの」に成立してくる。元来、自己に対して常に異質性を含む他者は、このように自己と分離され対象化されて捉えられるようになるのは、むしろ自然であるとも言えよう。しかし、この自他融合の状態は決して幼児においてのみ生きられうるものではない。他者を「もの」に捉えるようになった後も、我々は時として自他融合の状態を再び生きることがあるのである。

B. 自他融合と共感

このように考えてくると、共感における自他の世界の生きられた同一性は、このような自他融合の状態においてこそ可能であると言いうるであろう。

すなわち、まず自己と他者とを分離して対象的に措定し、そこからいかにして他者を認識し、さらには他者と同一の世界を生きることとしての共感が可能になるのかという、伝統的的自我観において見られたような問題の立

て方では、結局、共感という現象を十分に理解することはできないと考えられるのである。

逆に我々は、我々の生きられた経験に定位することによって、「事後的」自己を認め、自他融合の状態を共感の基盤に据えることが必要なのである。この時、既に自他の世界の同一性は生きられており、この事態を反省的に捉えることによって、他者を認識することが可能となり、また私と他者の世界の同一性が確認できることになるのである。

Ⅳ. 共感の発生とその意味

A. 共感の発生

このように、我々が原初的には自他融合の状態を生きていたことから、自他を対象的に分離するようになった後も、時として自他融合の状態を生きることが可能であり、そしてそのことが、我々が共感することを可能にしているのである。さてそこで、実践的には我々がどのような態度をとる時、そのような自他融合の状態を生きることができるようになるのか、ということが次に問題として現われてくる。もとより我々の世界においては、それぞれ個別的な経験を通して、様々な複雑にからみあった地平構造が作り上げられている。我々はそれぞれ異なった生活史をもつ以上、我々の作り上げた地平構造は、当然ひとりひとり異なっている。従って、私と他者とが同じ場所で同じ光景に出会ったとしても、それをどのようなものとして、どのような意味において捉えるのかは、異なっていることが多い。もちろん、たまたま一致している場合もありうるし、このような場合には、共感も容易に起こりうるであろう。しかし、多くの場合、私と他者とは同一の場面においても異なった経験をしているのである。そこで、そのような状況から、どのようにして私が他者と同一の世界を生きるということ、すなわち共感が成立するのか、ということが問題となるのである。

例えば、私が映画を見て、その主人公に共感する場合を考えてみよう、映画が始まったばかりの時点では、私は彼について何も知らない。従って、映画の冒頭でいきなり彼が泣くシーンが出てきたとしても、私は彼に共感することはできない。しかし、映画のストーリーの展開につれて、私は徐々に彼の状況が、すなわち彼の生きる世界が分かってくる。そしてやがて彼に共感することが起こってくるのだが、その時もはや私の世界から「私」はなくなっている。知らず知らずのうちに、彼もまた、私とは異なった存在たる「他者」としての意味を失ない、そこでは私と他者との区別はなくなり、私は彼

と同一の世界を生きている。いやむしろ、「彼の世界を生きている」と言ってもよいほどになるのである。この時、私は映画に集中し、主人公の世界に集中していた、ということが言える。もとより映画館という特殊な空間の中で、そして周囲の光景が消える暗闇の中には、集中しやすいという条件が揃っている。

しかし、例えばもし前に座っている人のヒソヒソ話が気になったり、映画が終わってからどこへ行こうかなどと考えていたりすれば、映画に集中することも、従って主人公に共感することもできないのである。

しかし、また単に映画に集中するだけでは共感できるとは限らない。例えば、主人公が感情を溢れさせる場面が、前後の脈絡も分からぬまま次々と出てくるような映画があったとしても、私がひとつひとつの場面にいくら集中したとしても、主人公に共感することは不可能であろう。共感できるためには、映画には、主人公がどのような経験をし、どのような考えをもち、どのような状況の中で、そのような感情をもつに至ったのか、という生きられた体験の経緯が描写されていなければならない。すなわち、これを共感者の側から言えば、主人公の生きた世界を志向し、そこにこそ集中しなければならないのである。主人公の感情の表出自体にもいくら集中しても共感には至りえないのである。

このように、他者の生きている世界を志向し、そこに集中していくという態度によって私にいわゆる「志向的越境³⁹⁾」ということが起こり、他者と同一の世界を生きることが、ひいては共感が可能となる。ここにおいて、私と他者との類似性や、私のもつ先行経験が問題になりうる。つまり、私との間の類似性が高い人に対して、あるいは私が似たような先行経験をもったことに対して、他者への集中が同じ程度だとしても、共感はいくらでも容易に生ずるといえることが考えられるからである。

しかし、注意しなければならないことは、むしろ以上のことが認められるにしても、先行経験や類似性がなければ共感が不可能だというわけではない、ということである。私が他者とは独立に、通常何かの、共感としてではない感情をもつ時には、わざわざ先行経験をもち出してその時の感情を思い出さずともなければ、類似の経験があることだけについて感情をもつのもない。自らにとって全く新しい経験をし、今まで自分がもっているとは想像もしなかったような感情をもつことすらあるのである。共感において、私が他者の世界に集中し、他者の世界を生き始めれば、私の世界がもはやそのように変容してきたのであるから、その時私は先行経験のないような全く新しい経験をし、そこにおいてそれまで全く経

験したことの無い、新しい感情をもつこともありうるのである。

そしてこのことは、次に見るように、共感という現象を経験することが、共感者にとっていったいどのような意味をもつのか、という問題と関わって、重大な意義をもつのである。

B. 共感者にとっての共感の意味

共感という現象において、我々はひとりひとり異なった経験の構造をもつにも関わらず、他者の世界に集中し、それを志向することによって、他者に共感することが可能となる。では、共感を経験することは、共感者にとっていったいどのような意味をもつのだろうか。

1. 自他の違いと共感

ここでまず考えられることは、共感という現象は、むしろ我々ひとりひとりが異なっているからこそ、そしてそのことを、我々が暗黙のうちにも自明の前提として持っているからこそ、我々にとって意味のある現象となるのではないか、ということである。

このことはまず、自己意識さらには他者意識を未だ獲得していない幼児の場合を想像してみれば分かる。彼は、自他融合の相において、他者と同一の世界を生きることにはできるにしても、彼の世界においては、その経験は「他者の」ものとも「自己の」ものとも判然としていないのであるから、それをもし反省的に捉えることができたとしても（自己意識のない幼児に、反省的に捉える能力があるかどうかは、非常に疑問であるが）、その経験は「他者」と同一の世界を生きることとしては捉えられないであろう。

であるから、やや逆説的に言えば、私と他者との間に違いがあることは、共感が共感たるための、一つの重要な基盤なのである。

2. 世界の変容としての深い共感

しかし、共感という経験をより詳細に見てみると、私と他者との違いが重要な意味をもつ共感と、私と他者との違いがほとんど意味をもたない共感とがあることが分かる。

我々は前に、他者の世界との同一性の程度によって浅い共感と深い共感とがありうることを示した³⁴⁾。浅い共感とは、例えば「音楽会においてすばらしいと感じた」というような経験の志向的对象のごく部分的な所知相の一致によるものにすぎなかった。このような意味における一致は、私の既有的経験の構造には何ら影響を及ぼさない。たまたま他者との間で同一性が部分的に成立したのであって、このような場合には、私と他者の世界の違

いはほとんど問題にはならないのである。

これに対し、深い共感とは、他者の世界との同一性の程度が大きい共感であり、私と他者とはそもそも異なった経験の構造をもつ以上、それらの同一性が大きくなるためには、私は他者との違いを克服し、前節で見たように、私自身にとって全く新しい経験を生きるようにならなければならないのである。ここにおいて、私はそれまでの私の経験とは全く異質の経験を生きるのである。そしてそれを経験することによって、様々な対象についての意味づけは変化する。すなわち、私の経験の地平構造が大きく変容してしまうわけである。

このように、共感の経験はそれが深いものである時には、共感者のそれ以後の経験の構造を変化させてしまうほどのものでありうる。その意味で共感とは、我々の生活の中で大きな意味をもちうる、時に衝撃的たりうる経験なのである。

V. 共感と他者理解

以上のように、共感とは他者と同一の世界を生きるという経験である。そして、それが深いものである時、すなわちその同一性の程度が大きい時、私は私の既有的経験の構造に変化を受けるほどの深い経験をすることになる。このとき、単に私が他者に共感してだけでなく、他者もまた私に共感するような場面においては、この経験は私と他者との「出会い」の経験でもある。「出会い」においては、私と他者は互いの既有的世界を「出」て、それぞれにとって異質の他者の世界と「会い³⁵⁾」、そのことによって互いに自らの世界を変化させ、豊かにし、自らを変容、成長させるのである。

また、共感すること自体を目標にしても、共感とは成立しない。そのような態度は、前に見たように³⁶⁾、他者の世界とのわずかな同一性をもとに、自らの先行経験を参照しながら、他者が実際に生きている世界とは無関係に他者の世界を構成してしまう、「にせの」共感に陥る危険性をもっている。ここではむしろ他者の生きている世界を志向し、そこに集中する態度が求められているのである。

そして、共感自体を目標とする態度は、他者の世界へと自らの志向が向けられていないのだから、それは実は他者を理解しようとする態度とは言えないのである。これに対して逆に、他者の世界を志向する態度こそは、それを通してのみ共感が可能になる態度であり、たとえそれが、現実には常に共感に至るとは限らないにしても、真に他者を理解しようとする態度であると言えるのである。

る。

であるから、他者理解の多様なあり方の中で、共感が特に問題となるのは、それが真なる他者理解の態度の一つの理想的な結果として生じるからこそなのである。その意味で、共感を研究することは、他者理解の研究の中で一つの中心的な位置を占めなければならない。そしてさらに、他の様々な他者理解のあり方が、それと対比されて明らかにされていかなければならないのである。

おわりに

本稿では以上のように、共感たる現象の基本的な経験構造が明らかにされた。さらには、共感が他者理解一般の中で重要な位置を占めることが示唆された。今後は、本稿ではふれることのできなかつた、共感における身体性や時間性的問題、また、十分に展開できなかつた、「浅い」「深い」「にせの」等の共感の様々な様態、等をさらに明らかにしていくことが必要である。それらの研究を通して、教育の様々な側面と、さらには人間現象一般とつながりをもった、豊かな問題圏が開示されるであろう。共感の具体例を分析していくことと合わせて、今後の課題としたい。

(指導教官 吉田章宏助教授)

注

- 1) 試みに各種の哲学事典、心理学辞典等を参照されたい。
- 2) これらの諸概念は、例えば Sympathie が「同情」、Einfühlung が「感情移入」と訳されることがあるように、必ずしも日本語の「共感」と等しい意味内容をもつわけではない。しかし、これら諸概念相互間の関係や区別は明確にされているとは言い難いので、ここではあえて区別せず、それぞれの代表的研究を選んで以下で参照することとする。
- 3) 「空想のなかでわれわれが受難者 (sufferer) と立場をとりかえることによって、われわれはかれの感じることを考えたり、それによって作用されたりするようになるのだ…」 Smith, A. 1759 “The Theory of Moral Sentiments” London (アダム・スミス 1973, 『道徳感情論』, 水田洋訳筑摩書房, p.6)。
「われわれは、他の人びとが感じることに、直接の経験をもたないのだから、かれらがどのような感受作用 (affection) をうけるかについては、われわれ自身が同様な境遇においてなにを感じるはずであるかを考えるよりほかに、観念を形成することができない。」同上, pp. 5-6。
- 4) Einfühlung たる概念は一般には「感情移入」と訳されることが多いが、これは内的状態を外界において捉える認識作用一般を指し、他者を認識する作用については「自己客観化」(Selbstobjektivation) とも名付けられている。Lipps, T. 1903 “Leitfaden der Psychologie” (リップス, T. 1934, 『心理学原論』, 大脇義一訳, 岩波書店, p. 318)。
- 5) 「一定の感覚的に知覚された過程と状態性を捕捉する時に

かつて私に於て体験したと同様の生活の活動、感情、意志などの考えが直接に私、即ち捕捉者の内に起こる。そして私の現在の体験の内へまで侵入する。その為にそれが私に於て捕捉の作用と一緒にあって唯一の意識体験を構成するに至る。……かくして同時に私の意識にとっては私から出たものでありながら、それは知覚され、捕捉された感性的なものに結び付けられ、あるいはその内に存して居る、略言すればその内へ客観化されたのである。」同上, pp.96-97, なお、引用にあたって、旧仮名づかい、旧漢字は改めた。以下についても同様。

「例えば私はいつか悲しかった。その際私は同時に悲しみの身振を現出しようとする傾向を体験した。……そして私はその傾向に従った。……所が今やこの身振をどこかで見ると、そうするとそれと同様直接にこの身振の知覚内にもっと正しく言えば私の統覚内にその身振を自分が引き起そうとする傾向が存する。所が是は私の悲しみの中に離すべからざる構素として蔵められているのと同じの傾向である。そうであるからその傾向の現出は、それと相合して唯だ一つの体験をなしているところの悲しみの再現を含む。」同上, p.320。

- 6) 「本来の共同感情は、さしあたり、他なる存在者たちの体験、さらにかれらの感情の諸状態を体験することをもふくめて、これを単に把握し、理解し、場合によっては追隨的に生きる(「追感得する」)ことにのみ用いられているような一切の態度から切りはなされなければならない。……共苦によってはじめてわたしに他人の苦しみが与えられるようになるのではなく、この苦しみはなんらかの形式によってあらかじめ与えられているのでなければならず、かくしてわたしは、他者へと向かいながら共に=苦しむことができるのである。」 Scheler, M. 1923 “Wesen und Formen der Sympathie” (シェラー, M. 1977, 『同情の本質と諸形式』, 青木茂・小林茂訳, 白水社, pp. 33-34)。さらに同上, pp. 33-103, 174-177を参照のこと。
- 7) その他の哲学、倫理学等における共感の研究については、Wispé, L.G. 1968 Sympathy and Empathy, in “International Encyclopedia of the Social Sciences” Vol. 15, Macmillan, New York, を参照。
- 8) Dymond, R.F. 1949 A Scale for the Measurement of Empathic Ability, Journal of Consulting Psychology, Vol. 13, No. 2, pp. 127-133.
Rogers, C.R. 1957 The Necessary and Sufficient Conditions of Therapeutic Personality Change, Journal of Consulting Psychology, Vol. 21, pp. 95-103.
- 9) Borke, H. 1971 Interpersonal Perception of Young Children, Developmental Psychology Vol. 5, No. 2, pp. 263-269.
Feshbach, N.D. & Roe, K. 1968 Empathy in Six-and Seven-Year-Olds, Child Development Vol. 39, pp. 133-145.
- 10) 高野清純 1982, 『愛他心の発達心理学』有斐閣
マッセン, P.・アイゼンバーグ・バーグ, N. 1980, 『思いやりの発達心理』菊池章夫訳, 金子書房。
- 11) この他、心理学における共感研究の全般的傾向については、春木豊・岩下豊彦編著 1975, 『共感の心理学』川島書店, に詳しい。
- 12) Hoffman, M.L. 1978 Empathy, Its Development and Prosocial Implications, in Keasy, C.B. (ed.) “Nebraska Symposium on Motivation 1977” University of Nebraska Press.
Chandler, M.J. 1977 Social Cognition, in Overton,

- W.F. & Gallagher, J.M. (eds.) "Knowledge and Development Vol.1, Advances in Research and Theory", New York.
- 13) 無藤隆・久保ゆかり 1982 社会的認知, 無藤隆編, 『ピアジェ派心理学の発展 I』国土社, 所収。
春木豊 1975 共感の社会心理, 春木・岩下編著, 前掲書, 所収
Chandler, 前掲書
- 14) Chandler, 前掲書; Hoffman, 前掲書; 無藤・久保, 前掲書, 等を参照。
- 15) ただし, このことは何も「怒り」という感情が共感されないということの意味しているのではない。なぜなら, 例えばAという人物がBという人物に怒りを感じている時, 私もしAと同じようにBに対して怒りを感じたとすれば, それは私がAに共感したのだ, と言うことは可能だからである。
- 16) 一切の論理行為以前, 一切の述語的判断以前に, 我々が常に既に生きている経験のレベルからの, 言いかえれば, 「生活世界」へ還帰することによる, 考察が必要なのである。
「一切の個別的経験の普遍的基盤として, 経験の世界として, 一切の論理行為以前に直接にまえてあてられるような世界にかえていかねばならない。経験世界への帰還は「生活世界」への帰還, すなわち, そのなかにわれわれがつねにすでに生活している世界, そして一切の認識行為や一切の学問的規定の基盤をなす世界への帰還である。フッサール, E. 1975, 『経験と判断』長谷川宏訳, 河出書房新社, p33。
- 17) 「あらゆる経験は, 現実的で確定的な知識の核, つまり, 直接に対象そのものを明確に規定する内容をもつが, しかしまた, ありかたを規定したこの核, 『実物がそこにある』というかたちで本来あてられる核をこえて, 経験の地平をもつのである。……どんな規定も最終的なものではなく, 現実に経験されるものは同一物にかんする可能的経験の地平をつねに無限にもっている……かくて, 個別的事物にかんするあらゆる経験は内的地平をもつ。……経験される事物は内的地平をもつばかりでなく, 付随対象, つまり, いま経験されているものとはちがっていたり, ある類型が共通していたりするもので, 現にわたしの注意はむけられていないが, いつでもそれに注意をむけることができるような対象, そういふ付随対象によって構成される, 開かれた無限の外的地平……をもっている。」同上, pp. 24-25。
- 18) 「フッサールが『世界』という場合, 彼が思念しているのは, 開放的地平性一般ではなく, 地平を超越している全体地平であるということは明らかである。」ゲルト・ブランド 1976, 『世界・自我・時間』新田義弘・小池稔訳, 国文社, p41。
- 19) 生後間もない幼児が, 他の幼児の泣き声に刺激されて自分も泣き出すという, いわゆる「伝染泣き」は, 他者と同一の世界を生きつつ, 他者の感情が理解できていない例だと考えられるが, これは後述(ⅡB1)するように, 共感としての意味をもたない経験だと考えられる。
- 20) 物は, 我々にとっては, ある一定の局面を通して, 一定の遠近関係の中で与えられるほかはない。我々の「知覚的経験のパースペクティブ性」とはこのことである。(メルロ=ポンティ, M. 1964, 『行動の構造』滝浦静雄・木田元訳, みすず書房, p276)。
- 21) 「風景の肢節は, <単なる知覚的射映>としてではなく, <射映以上のある相>で覚知されます。……凡そ人間の知覚的風景においては, 肢節はその都度すでに所与的射映相以上の或る所知相で覚識されるという二肢的構造性を呈します。」廣松渉 1980 他我認識の問題, 大森荘蔵他, 『心一身の問題』, 産業図書, 所収, pp. 142-143。
- 22) 従って, 共感するためには, 私と他者の世界が同一であることをまず判断しなければならない, というわけではない。
- 23) このことに関しては, Ⅶにおいて後述される。
- 24) 「自己」, 「自我」, 「私」という, 似た意味内容をもつ三つの概念がある。ここでは一般的な区別に従って, 「私」は具体的に生きられている経験のレベルで考えられるものとして, それを抽象的に捉えた時の, 主体的側面を「自我」, 容体的側面を「自己」として, 一応原則的には区別して用いることとする。しかし, もちろんこのように明確に区別することには無理がある。また, 本稿の論旨の展開に特に影響するわけでもないで, ここではこの区別は特に厳密には考えない。
- 25) 「デカルト以来の近代哲学の枠組を規定して来たのは二元論, すなわち, 心と物, 主観と客観の分離対立, および, それらに対応した内的知覚と外的知覚の区別である。われわれに直接経験されるものは, 一方では内的知覚の対象である自己の体験であり, 他方では外的知覚の対象である物的与件であり, そしてそのみである。この枠組の中で他者経験を位置づけようとするれば, 外的知覚に媒介され, それに基づけられた二次的なものとならざるを得ない。」村田純一 1982 他者と表現, 新田義弘・宇野昌人編, 『他者の現象学』北斗出版, 所収, pp. 119-120。
- 26) 本稿 I A 1 参照。
- 27) シューラー, 前掲書, pp. 380-388 を参照。これについてのまとめは, ナタンソン, M. 編 1983, 『アルフレッド・シュッツ著作集 第1巻 社会的現実の問題 [I]』, 渡部光・那須壽・西原和久訳, マルジュ社, pp. 250-251 にある。さらに, 村田, 前掲書, pp. 119-122 を参照。
- 28) シューラー, 前掲書, pp. 390-422。
- 29) 「ところが私に見えるものは目の前, または遙かかなたに, つまり頭蓋骨の外に見え, また聞えるのです。ですから, 脳が何かを受取るとどうして頭の外部にものが見えるのか, それを誰も答えることができないのです。」大森荘蔵 1980 心, 大森荘蔵他, 前掲書, 所収, p217。
- 30) 「眼のあたりの疲れ, 尻の痛さ, ……そして眼前の風景, その全部, それが『私はここに居る』ということなのです。その全部の他に『私が居る』のではなく, その全部のあり方……が『私はここに居る』ということなのです。」同上, pp. 221-222。
- 31) 「『私というもの』, 『自己というもの』は, ……哲学的あるいは科学的な議論の対象としては存在しえても, 私たちの実践的な生活にとってはもともと仮空のもの, 存在しないものである。」木村敏 1983, 『自分ということ』, 第三文明社, p61。
「この述語的な『ある』ということの生じているその場所において, 私の自分ということも, 同じように述語的なありかたで現われて来るのである。」木村敏 1969, 『自覚の精神病理』, 紀伊国屋書店, p33。
- 32) 「小さい子どもは自分自身を自分としてはまったく気づいていないように見える。子どもは自分の体をあたかも自分のものではないかのように扱う。自分の足の指はおもちゃであるし, 自分の顔を血が出るまでひっかいたりする。」オールポート, G.W. 1982, 『パーソナリティ』, 詫摩武俊・青木孝悦・近藤由紀子・堀正訳, 新曜社, p139。
- 33) 「他人は彼自身のところから私の身体の運動的志向の圏内に入りこみ, かの『志向的越境』(フッサール)に身を投ずることになり, そのおかげで私は他人にも心理作用を認めたり, また私自身を他人の中に運びこんだりすることになるのです。」メルロ=ポンティ, M. 1966 幼児の対人

- 関係、『眼と精神』、滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、所収、p.136.
- 34) 本稿Ⅱ A参照。
- 35) 荻野恒一 1979、『故郷喪失の時代』、北斗出版、p.39。
- 36) 本稿Ⅱ B参照。